

## 29. 重症心身障害者施設入所者の地域移行に関する調査 －本人の選択が尊重される仕組の構築

原順子（四天王寺大学大学院） 笠原幸子（四天王寺大学大学院）  
逢坂隆子（旧所属 四天王寺大学大学院：現所属 NPO HEALTH SUPPORT OSAKA）  
山野恒一（四天王寺和らぎ苑） 原健一郎（四天王寺和らぎ苑）  
○佐藤祐輔（四天王寺和らぎ苑） 西原彩菜（四天王寺和らぎ苑）  
山内智美（四天王寺和らぎ苑）

### 1. 「地域移行」の定義

「地域移行」という用語についてさまざまな解釈が可能であり、「入所施設から、住居を移すこと」「入所施設から住居が移る過程」「入所施設での地域とつながった生活」等があげられる。そのため、本研究での「地域移行」の定義を予め明確にしておく必要がある。

本研究での「地域移行」とは、「施設内での完結した生活から、施設外との資源と結びついた生活化」と定義する。本研究での「地域移行」のイメージは図1で表す。

図1 「地域移行」のイメージ



### 2. 研究目的

旧重症心身障害児施設（以下、重心施設）での支援過程における「地域移行」に焦点をあて、重心施設入所者が、どのような支援や体制（支援要素）により「地域移行」が促進されるのか（促進要因）を明らかにし、それぞれの関係性を分析する。

### 3.研究計画

#### ・調査対象者

重心施設での「地域移行」に対する促進要因を検証するには、多面的に事象をとらえる必要があると判断し、重心施設従事者だけでなく、重症心身障害者の通所事業やケアホーム等の地域生活を支援する従事者を交えた、ヴァリエーションのある対象者を選定した。

対象者の選定については、スノーボール方式により、先駆的な施設を選定した。調査協力者は12名である。属性については表1で示す。

表1 インタビュアーの属性

調査協力者	所属施設種別
A	ケアホーム
B	療養介護（旧重症児施設）
C	療養介護（旧重症児施設）
D	療養介護（旧重症児施設）
E	療養介護（旧重症児施設）
F	療養介護（旧重症児施設）
G	生活介護（旧重症心身障害者通所事業A型）
H	ケアホーム
I	療養介護（旧重症児施設）
J	療養介護（旧重症児施設）
K	療養介護（旧重症児施設）
L	生活介護（旧重症心身障害者通所事業A型）

#### ・調査期間

調査期間は平成24年11月～平成25年8月である。

#### ・調査方法

調査協力者の実践施設を訪問し、会議室等のプライバシーが確保できる場所でインタビューを行った。インタビュー形式はインタビューガイドをもとに半構造化面接を用い、幅広い回答を促すため調査協力者の話の内容にそって挿入質問を行った。所要時間は45分から60分程度であった。調査にあたっては、ICレコーダーによる録音を行い、後日逐語化の作業を行った。

#### ・データの分析方法

データは修正版グランデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて分析を行った。

(M-GTA)を選択した理由は「分析結果であるグランデッド・セオリーは、分析焦点者を中心とした人間の行動や相互作用の変化、うごき、を説明するものである。」木下(2003:218)と指摘されるように、本研究目的においても、「地域移行への促進要因の検証」というさまざまな人間が介する支援のなかでの相互作用のなかで促進要因が形成されるものであろうと仮説を立てた。そのため本研究に最も適した分析方法として (M-GTA)を採用した。

・倫理的配慮

調査協力者には、事前に調査について口頭および文書にて十分に説明を行い、調査協力への同意を得た。個人情報はずべて匿名化し、調査結果の公表過程において個人が特定されないように配慮した。

4.結果

地域移行への促進要因に関する 14 の概念を抽出し、5つのカテゴリーに分類された。

カテゴリー、概念を詳細、以下のカテゴリーと概念一覧(表2)とストーリーラインで説明し、それぞれのカテゴリー、概念の関係性を結果図(図2)で表す。

なお、※コアカテゴリーを【 】,カテゴリーを《 》、概念を< >で示す。

表2 カテゴリーと概念一覧

カテゴリー	概念
【本人、家族が地域移行への選択肢を持てる支援】	<命を守るための医療・介護支援の確保> <個々のニーズに基づいた生活支援> <日中活動の機会> <ボランティアとのつながりによる社会との接点>
《日常的な施設と地域の相互関係》	<地域ニーズに応じた施設運営> <施設メリットの地域共有>
《本人・家族ニーズの高まり》	<本人、家族の施設外での生活のイメージ化> <本人と家族との距離が縮まる> <生活の幅が広がる>
《職員のモチベーションの高さ》	<事例の積み重ねによる実現力> <施設の限界性を認識した上での個別支援>
《ソーシャルワーク機能の発揮》	<関係機関へのソーシャルアクション> <本人・家族への十分な意向確認によるアドボケーション> <施設によるバックアップ機能の構築>

#### ・ストーリーライン

重心施設での「地域移行」支援において、最も重要でありすべての概念の土台となる促進要因（コアカテゴリー）は【本人、家族が地域移行への選択肢を持てる支援】であり、本人、家族が「地域移行」という生活を送りたいというニーズが芽生えるための第一歩になる。構成する概念では、地域移行への選択肢を持てるための要因が抽出された。＜命を守るための医療・介護支援の確保＞を大前提とした医療・介護の保障をもとに日常の＜個々のニーズに基づいた生活支援＞のなかで＜日中活動の機会＞や＜ボランティアとのつながりによる社会との接点＞により「地域移行」を視野に入れた個別支援の充実が図られる。

これらの促進要因のなかで、一人ひとりの入所者が「地域移行」という選択肢を持てニーズが芽生える。

【本人、家族が地域移行への選択肢を持てる支援】により芽生えたニーズは、個別的、具体的なイメージを持つための体験的な活動等により＜本人・家族の施設外での生活のイメージ化＞が図られる。また、＜本人と家族との距離が縮まる＞、＜生活の幅が広がる＞という実感を持てると、《本人・家族ニーズの高まり》につながる。

支援者側における環境要因として《職員のモチベーションの高さ》が重要となってくる。利用者一人ひとりの個別性に応じ、支援を構築することで＜事例の積み重ねによる実現力＞につながる。また、個別支援を提供するなかで、＜施設の限界性を認識した上での個別支援＞が行われることによって、施設資源に不足するものを認識し、外部資源の可能性を模索していく。

施設環境の面では、在宅者に向けた相談支援や、訪問看護等の＜地域ニーズに応じた施設運営＞や、在宅支援者のための研修等による＜施設メリットの地域共有＞が図られることにより《日常的な施設と地域の相互関係》が構築され、施設外資源との距離が縮まる。

以上のカテゴリー、概念は施設内における促進要因であるが、「地域移行」では施設と施設外との関わりが重要となる。施設内で「地域移行」の準備をいくら進めても、施設外資源との調整ができなければ、「地域移行」は実現しない。そこで《ソーシャルワーク機能の発揮》が重要となる。「地域移行」を進めるなかでは、既存のサービスや制度では対応できないことも多く＜関係機関へのソーシャルアクション＞や、実際に「地域移行」が実現した後も＜本人・家族への十分な意向確認によるアドボカーション＞や＜施設によるバックアップ機能の構築＞により「地域移行」の実現と定着につながる。

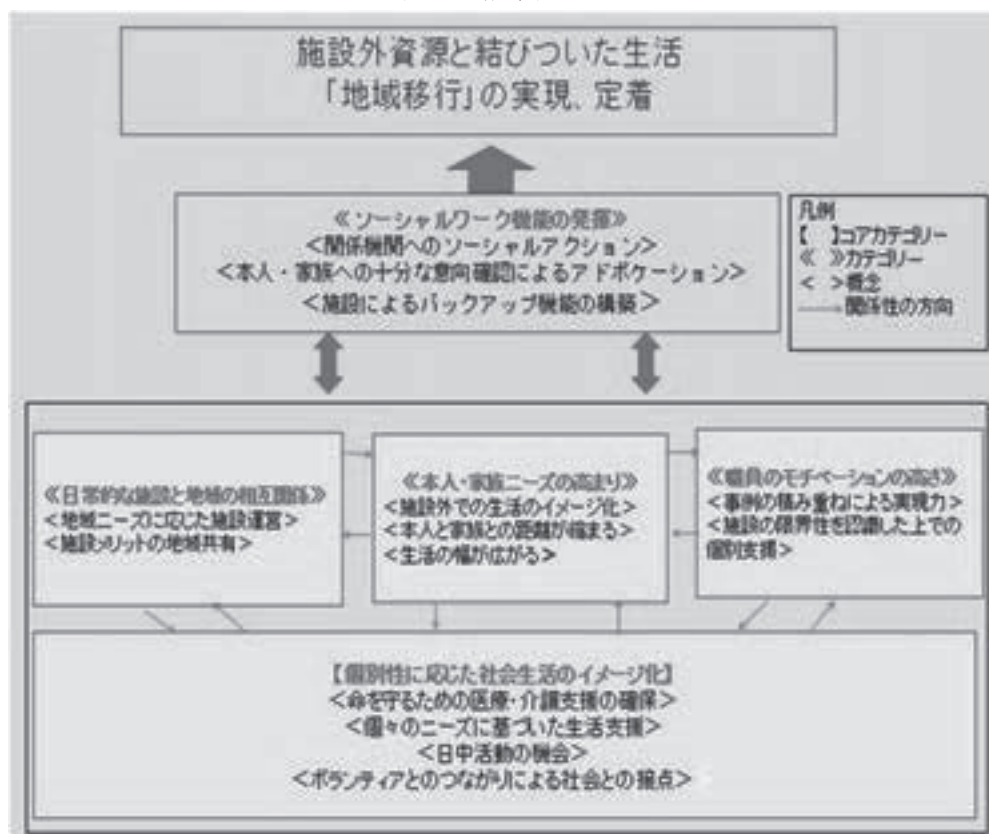
## 5.考察

利用者一人ひとりのニーズを把握し、個別支援していく過程のなかで、多様な社会生活へのニーズも見えてくる。施設での集団支援のなかでは、いかに個別支援を充実するかが大きな課題であるが、「地域移行」は利用者の権利でもあり、それに向けた支援の構築は必要不可欠である。また、「地域移行」のためには、施設外へ向けた多くの手続き、調整等が必要であり、コーディネーター（ソーシャルワーカー等）の役割が大きく影響する。

重心施設での「地域移行」に向けての支援は草創期であるが、その一つひとつの土台は重心施設での支援実践により、すでに構築された部分もあるのではないだろうか。今後、「地域移行」ではそれらの実践が、一点化されるのではなく、複数の実践が連携し合うことで重心施設での「地域移行」は進んでいくと考える。

施設入所者の選択が尊重され、それが実現できるよう支援していくことを継続していくなかで、「地域移行」も普遍的なものとなるであろう。

図2 結果図



## 6.文献

木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリーアプローチの実践—質的研究への誘い』弘文堂

## 7.経費使徒明細

インタビュー調査のための各施設への交通費（新幹線代等） ※調査員数 35 名分（延べ）×往復交通費	419,540 円
インタビュー協力者への謝品代（12 名×5,000 円）	60,000 円
インタビュー調査員の昼食代（35 名×1,000 円）	35,000 円
合計	514,540 円